

目次

はじめに	1
地域の現状と課題、めざす成果	2
事業実績	
生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8	3
制作風景動画の作成、ワークショップの開催	4
人材育成研修	5
連携事業-ワークショップ、移動美術館	6
AO-KUMA BRUT、アジア太平洋知的障害・発達障害者芸術祭	7
ギャラリーウォール	8
講演の実施、作家・作品の調査・発掘	10
相談支援	11
評価・発信、メディア、ネットワークづくり	13
本事業に関わる第三者評価	14
生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8 出展作家紹介 キュレーター 長尾萌佳氏	15
展覧会来観者の感想(抜粋)	28
生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8 おわりに	33
アール・ブリュット パートナーズ熊本・社会福祉法人愛隣園 事務局	35

はじめに

日頃より障害のある人たちの芸術活動支援に、ご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。この度、令和4年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業報告書を作成しましたので、ご一読頂ければ幸いに存じます。

本年度、熊本県立美術館本館第一展示室で開催された生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8 には、1,806 名もの方々にご来場頂きました。コロナ禍の中、新様式への対応と工夫を重ね、開催することができました。作家の皆様をはじめ、関係者の方々には多大なご協力を賜りましたことに、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回、展覧会場内では県内福祉事業所のグッズ販売、作家の実演、制作風景動画の作成、ギャラリーツアー等を実施したことで、来場者の作家への理解が進みました。また、作家の表現活動を「作品」として昇華するために、家族や支援者が行う様々なことを体験する、ワークショップを実施しました。

この他、まちづくりイベント、やまがアート、人権フェスティバル、難病友の会などの団体と連携し、展示を行う機会を頂きました。また、昨年度開設したギャラリーウォールは常設展示会場の機能に加え、地域交流の場となるように、その活用方法を模索し、コロナ対策を十分に行いながらワークショップを開催しました。

県内でも、各事業所が工夫を凝らし、芸術活動支援を展開していく潮流が起きています。将来的には、各々の事業所が手を組んで、県内の芸術活動支援がより活性化するよう願っています。

これからも、沢山の方々の支援を賜りながら、障害者芸術活動の振興に努めていきたいと存じます。

社会福祉法人 愛隣園
アール・ブリュット パートナース熊本

地域の現状と課題

（現状）

コロナ禍では、展示や作品を二次利用した物販イベントの多くが自粛となった。また、主催者側が感染症対策に万全を期しても、感染リスクの不安を拭えないことから、会場に行くことが難しいということもよく耳にしてきた。Withコロナへの社会認識が少しずつ進み始め、新しい様式での展示やイベント等が求められている。

この2年間、作家の皆さんは様々な混乱と不安の中でも変わらずに創作（表現活動）を続けていて、それらが作品に表現されている。

（課題）

感染防止に苦慮しながら創作支援を続ける家族・支援者は、作家の自立を考え、また作品の保管の難しさもある中で、売買や二次利用等を進めたいという意識を持つようになった。

県立美術館での展示を続けてきたことから、障害のある人たちの芸術への関心は高まっており、作品売買や二次利用の相談が増えている。展示やワークショップ、研修を通して、障害のある人への理解を深める機会の創出と、関心をもつ人々のネットワークを活かして、多様化する作家のニーズに合わせ、作家の利益となるような質の高い活動を継続することを目標とする。

事業実施により得られる効果、めざす成果

活動当初から一貫して掲げる「障害のある人たちが生きやすい社会になる」という目標に向けて、本年度は次の3点に重点を置いて取り組んでいく。①「年間を通して障害のある人たちの芸術に触れる機会となる常設展の継続と新たな活用方法の模索」②「熊本県、熊本市、県立美術館、その他関係者とタイアップした展覧会の開催」③「作家の自立と社会経済活動への参加」。

（得られる効果、めざす成果）

①日常的に障害のある人の芸術に触れる機会は、表現を通して障害への正しい理解と差別解消へつながり、新たな関係性を育む。②「展覧会」を人材育成の場として活用でき、芸術活動支援の質が高まる。③作品を通じた社会経済活動への参加が可能となる。④作家・家族・支援者が抱える悩みを共に解消していくことで、生活の安定と支援の質が向上する。

生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8 開催

令和4年11月16日～11月27日

熊本県立美術館 本館 第一展示室

総来場者数 1,806名 アンケート回答数 167件

開会式、ギャラリーツアー、県内9事業所のグッズ販売

県内25名の作家。約250点を展示



事業実績

制作風景動画の作成

今回の選出作家25名のご家族・支援者に作家の皆さんの制作中の様子等を撮影して頂きました。作家の皆さんの普段の様子が垣間見えます。この何気ない日常から今回の展覧会に選ばれるような作品が生まれています。



ワークショップの開催

令和4年11月16日(土) ~

コーディネーター:長尾萌佳キュレーター 協力:藤岡浩子氏

ART BRUT VOL.8

一緒に作品を展示して
展覧会を完成させよう!

ミニワークショップのご案内

藤岡祐機さんの生み出したたくさんの紙片のなかから

1点を選びとり、観察、採寸する

ミニワークショップを開催します。

みなさんに選んでいただいた作品を展示し

展覧会が完成します。

見ること、触れることを通して、

藤岡さんがはさみ一つで探求している美の世界を

感じてみようという試みです。

体験スケジュール

11月16日(水) 13:30 ~ 14:00 ~

※各回先着 20名様 <参加無料>



人材育成研修

令和3年度は 130 件を超す相談支援を行い、課題が少し見えてきました。相談内容から、①作品をデータで残すこと②原画売買や二次利用（グッズ化、冊子の表紙等）、作品保存に関することが、熊本県内の芸術活動支援実践者の課題だと言えます。そこで、今回はネットワーク全体のスキルアップを目指し、研修会を企画しました。

- ① 作品売買・二次利用・作品保存に関する勉強会
日時:令和4年6月24日 19:00~
会場:くまもと県民交流館パレア 第一会議室
講師:インディペンデントキュレーター 真武真喜子 氏
- ② 作品撮影のコツと記録に関する勉強会
日時:令和4年6月 18 日 15:00~
会場:ハイブリッド(熊本県立美術館、ZOOM)
講師:熊本日日新聞社編集局デジタル編集部 部長 岩下勉 氏



ART BRUT PARTNERS KUMAMOTO
アート・ブリュット パートナース熊本

作家・家族 支援者 研修会

6/18 SAT
15:00~

作品撮影のコツと記録に
関する勉強会

講師:岩下 勉 氏
(熊本日日新聞社 編集局 デジタル編集部 部長)
(学芸員)

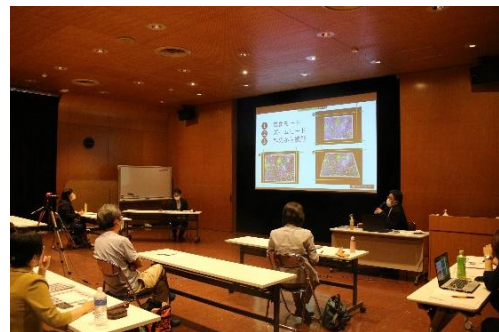
令和4年6月18日(土) 15:00~ 会場:熊本県立美術館本館 文化交流室

参加申し込み・参加方法
メール(aalinkan@magma.jp)で、下記事項を事務局までお送りください。
① 参加する方全員のお名前と連絡先
② 会場参加かオンライン参加
③ 講師の方にご質問等聞きたいこと 締め切りは6月7日(水)です。

オンライン参加の方:お送り頂いたメールアドレスに zoom の URL をお送りします。
会場参加の方:当日は熊本県立美術館文化交流室にお越しください。(熊本中央区二の丸二番)
※参加が難しい方のために、後日 YouTube 配信を予定しております。

ご不明な点がございましたら、遠慮なく事務局の納富・垣田までお尋ね下さい。
皆様のご参加をお待ちしております。

お問い合わせ:アート・ブリュット パートナース熊本
(障害者芸術文化活動支援センター@熊本 室須館)
TEL:0968-43-2771 Mail:aalinkan@magma.jp



事業実績

参加者の声

- 大変わかりやすく、すぐ実践したいと思いました。ちょうど撮影方法と苦闘していたので、とても良い勉強になりました。
- 利用者さんの作品を作品として生かせるよう、私達支援者が苦手意識を捨てて、テクニックを磨いていきたいものだなーと思いました。
- これからも定期的に続けて頂けるとありがたいです。

連携事業 -ワークショップ-

令和4年12月17日(土)
熊本日日新聞社

熊本日日新聞 4年11月26日で告知



参加者の声

○アイマスクを着けて、目で見ることができないことこんなに不自由なんだと分かった。困っている人がいたら、手伝ったりしたいです。

2022.2.4
熊本日日新聞記事より抜粋

アール・ブリュット移動美術館

- ① 5/29 街道浪漫 レプリカ13点
- ② 10/22 山鹿人権フェスティバル 作家4名+レプリカ7点
- ③ 10/28-30 難病友の会(きずなの会)レプリカ7点
- ④ 10/29-11/3 やまがアートin 鶴城 7名の作家
- ⑤ 11/7-11 熊本県庁 地下通路 レプリカ8点
- ⑥ 3/1-3 三岳小学校(閉校記念) レプリカ
- ⑦ 3/7-16 八代市役所 レプリカ

参加者の声

○個性豊かで、ステキな絵ばかりでした。小さな展示から大きな絵画まで、それぞれの作者の方が思いを込められたんだと感じました！

○芸術の世界に触れると希望を感じます。皆さんの生き生きとした色彩に生きる”力”を感じました。有難うございます。



街道浪漫



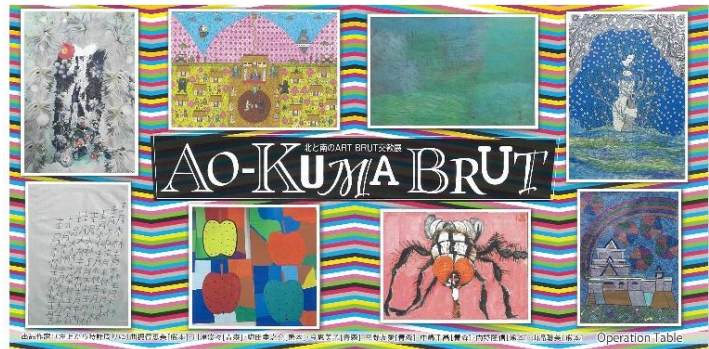
山鹿人権フェスティバル



やまがアート

AO-KUMA BRUT-北と南の ART BRUT 交歓展-

青森の作家4名と熊本の作家4名の作品を、北九州の Operation Table で展示。4月からは熊本でも開催予定。



postcard

AO-KUMA BRUT

2023 2/23(木・祝) ▶ 3/19(日)

全日 11:00~16:00 2/23(祝)にオープン 平日・休日は予約で予約【入場無料】

毎年「Operation Table」が場で開催する地域・地域のART-Brut展の開催地として選ばれる福岡県。青森の作家4名、今は熊本が熊本の人々の活動の場として、熊本に新しい作家が生まれました。今回はその活動の場として、青森と熊本の作家の活動の場として、熊本で開催された交歓展となり、青森の作家からは熊本で開催された交歓展の作家からは青森のイメージをモチーフにして、互に作品が完成しました。

出品作家
【青森から】 黒田あや、今野真由、中津由、平野みどり
【熊本から】 内野真実、熊本さとし、山根はるか、山根あかり

Operation Table

〒815-0027
福岡県北九州小倉北区東門町5-18
phone 093-234-8162
e-mail info@operation-table.com
http://www.operation-table.com/

2/23(木・祝) 14:00-16:30
トーク「青森/熊本のアート・ブリュット」
作家集談(自由参加)
定額入場料 1000円(Operation Table)
2/26(日) 14:00-16:00
ワークショップ「ビームライトで作る青森・熊本」
インスタレーション「2021-2022 ART BRUT展」
事前予約によるワークショップや作家のライブ
展示していただき、一緒にアート・ブリュットを創りたい方へ

事業実績

DPI 韓国 「アジア太平洋知的障害・発達障害者芸術祭」出展

日本代表作品1点をソウルの議員会館へ事務局員が搬入・搬出、連絡調整等に協力。

コーディネイト:DPI 日本会議
議長 平野みどり氏

新たなネットワークの構築。



ギャラリーウォール

4月 1日～ レプリカ展	50 名
5月 1日～ デイケア陶芸展	52 名
6月 1日～ レプリカ展	48 名
6月16日～ ゆうあい園 さをり織り展	70 名
7月 1日～ 山鹿灯籠 Tシャツ展	150 名
7月16日～ 品川英樹 写真展	52 名
8月 1日～ 星子悦郎 水彩画展	130 名
9月 8日～ 愛隣館ぴあぴあ作品展	108 名
10月16日～ 清本すみ子 四季の花と少女展	82 名
12月 1日～ ゆうあい園 さをり織り展	70 名
1月 4日～ レプリカ展	73 名
1月16日～ 中山正一郎 木作品展	128 名
2月 1日～ 布の絵コレクション展	237 名



事業実績

スタッフの声

○ギャラリー展示がある事で、一般の鑑賞者の方とぴあぴあ利用者の方の交流の場が繋がって良かったと思います。

○作家の方々の制作意欲がすごく、素晴らしく生き生きと活動されているのに感動いたしました。

○作品が飾られると雰囲気ガラリとかわり毎回興味深いです。今後も様々な作家の方へとGWが広まってたくさんの作品に触れられると有難いです。ぴあぴあに来ると作家さんと交流ができるのも醍醐味と思いました。

○観覧に来られるのが作家さんの知人の方が多く、もっと一般の方にも観て頂けたらと思います。

○作家さんと利用者さんとのワークショップみたいなのができたら面白いかなとも思いました。

ギャラリーウォール ワークショップ

令和3年度に開設した常設貸しギャラリーを、地域が盛り上がる場となるように模索しています。そこで、デイケア陶芸展に合わせて、子供たちを対象とした粘土体験のワークショップを開催しました。



日時：5月28日（土）10：00～11：00
会場：温泉プラザ3階ギャラリーウォール
参加費：無料 ※焼き締め希望者¥300
参加ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。

お問い合わせ
アール・ブリュット パートナーズ熊本
障害者芸術文化活動支援センター@熊本 愛隣館
Tel:0968-43-2771 Mail:ailinkan@magma.jp

事業実績



参加者の声

○まるからじゆうにさいげんしたのでたのしかったです。

○初めて粘土作りをして楽しかった。どんな作品になるか楽しみ。またいろいろな人の作品も気になる。

○とてもたのしかったです。かんせいするのが楽しみです。またつくりたいです。

講演の実施

1. 都城市社会福祉施設等連絡会

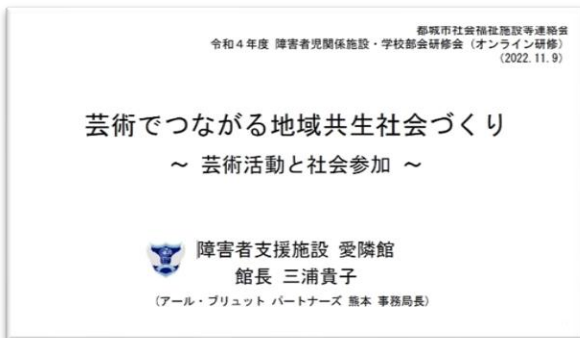
令和4年度 障害者児関係施設・学校部会研修会（オンライン研修）

「芸術でつながる地域共生社会づくり～ 芸術活動と社会参加」（2022.11.9）

アール・ブリュット パートナース熊本 事務局長 三浦貴子

2. ギャラリーツアー（11/16～）本展覧会キュレーター 長尾萌佳 氏

オンライン配信（11/21～）



作家・作品の調査・発掘

作家・作品訪問調査	62件
情報提供による作家発掘	5件



相談支援

これまで芸術活動支援に限定せず、生活面に关わるような相談支援も行ってきたことで、作家・家族との信頼関係の深まりを感じられます。また、作家ごとに芸術活動が広がるに連れて、多様化する芸術活動に関する相談支援も行いました。これからも作家の利益につながるよう、支援を続けていきたいと思ひます。

作家家族

自分たちで個展を開催したいと考えている。展示備品の貸出や事務局スタッフに展示協力をしてもらえるか。

事務局所有の展示備品の貸し出しを行った。展示については、展示方法等について検討し、伝えた。

事務局

協議会

協議会広報誌で芸術文化活動について、特集記事を組みたい。実践を交えて、原稿を書いてもらえるか。また、写真提供をお願いしたい。

原稿と写真の提供を行った。また、本原稿になるまで、調整を重ね、協議会広報誌に掲載された。

事務局

報道機関

熊本のある作家の取材をしたいと思っている。作家との調整と作家に関する情報提供をもらえるか。

作家と連絡調整を行い、打ち合わせの日取りを調整した。また、作家が当日の立ち合いを希望したので、送迎を含め対応等に協力した。

事務局

文化施設

青森と熊本の作家の作品を集めて展示したい。熊本の作家の作品について、作品を借りて、返却までの協力をお願いしたい。

熊本の作家4名について、連絡調整を行い作品の借受、会場までの運搬、返却までを行った。

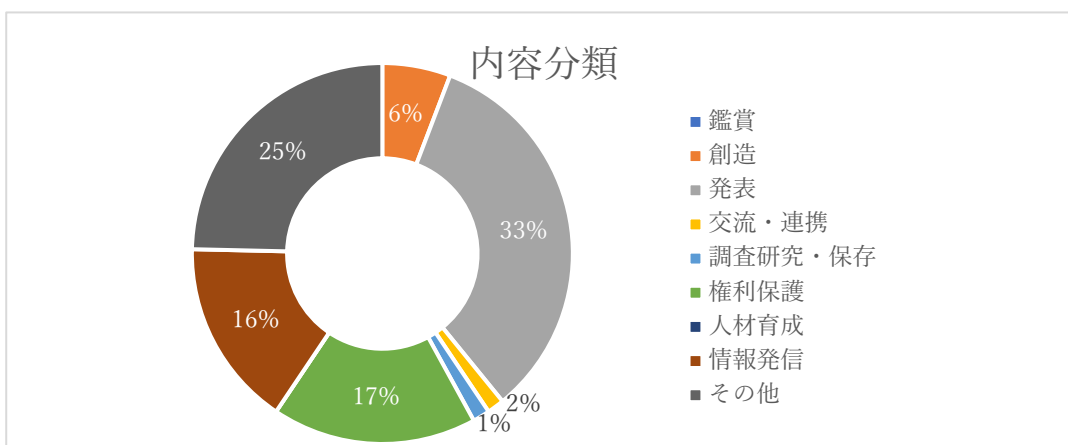
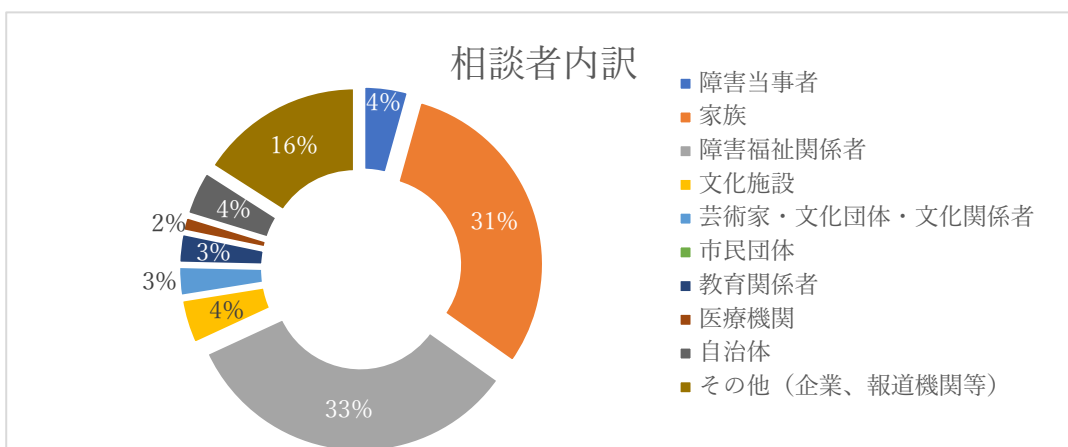
事務局

相談支援

連絡調整件数

情報提供、日程調整メール、会員メール(情報発信 35 件)

相談件数 95 件(作家・家族・支援者・企業 等)



相談割合に関して、昨年と比較すると障害福祉関係者からは全体の 33% (昨年 21%)、家族からも 31% (昨年 27%) と増加している。要因として、本年度 8 回目を迎えた展覧会でも分かるように、コロナ禍であっても地域にしっかりと根付いてきたことで、支援の輪が少しずつ拡がり相談者の増加に繋がっていると考えられる。また、医療機関からの相談も更なる拡がりとして期待したい。

内容では、「発表に関すること」の割合が最も高く、展覧会等を通じて作家、支援者、地域の方々から期待をされていることが伺える。これらのことを踏まえ、引き続き相談者に寄り添った丁寧な支援を行い、障害者芸術文化活動を継続してことが重要である。また、権利保護などについても随時情報を仕入れ、人材育成を含め知識を高めていく必要があると考える。

評価・発信

ウェブサイト 本事業に関する記事

投稿数 25件

アクセス数 12,142件

アール・ブリュット パートナース熊本

検索



メディア

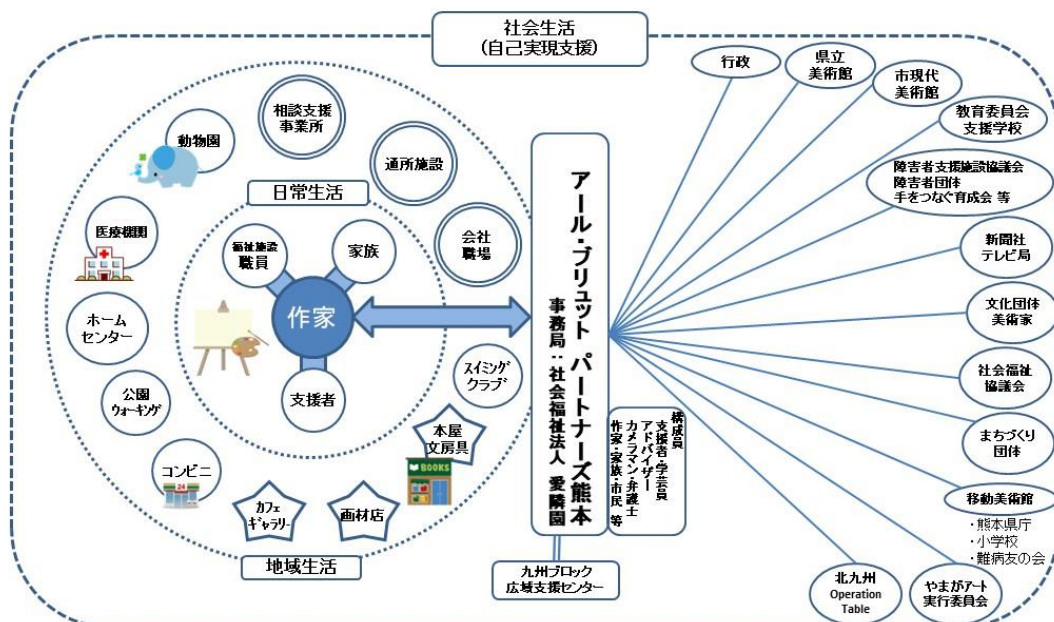
テレビ放送 2回（熊本放送、くまもと県民テレビ）

新聞掲載 2回（熊本日日新聞）

ネットワークづくり

地域資源の連携ネットワーク型障害者芸術活動支援モデル「熊本方式」2022

☆「熊本方式」とは、作家を中心に、福祉、教育、芸術、企業、行政等が市民団体として連携し、地域に根ざして、障害者芸術活動を振興していくモデルです。作家の家族等も輪に加わり、互いに刺激しあい高めあって行く(交互作用)を目指しています。作家の自立・社会参加と共に、芸術でつながる地域共生社会が目標です。



事業実績

本事業に関わる第三者評価

県内の方々との意見交換より

- 1 展覧会ポスター等を担当したデザイナーより。「開会式には多くの出展作家さんやご家族、美術や福祉など様々な立場の方が式に参加し、そこにいる方の熱意や無垢な喜びを垣間見ることもあり、とても印象的でした。特に作家さんやそのご家族は、自分の作品の前や、展覧会の垂れ幕にある自分の名前の前で記念写真を撮るなど、素直な喜びを直に得ることができた時間は、デザイン作業で参加させていただいている自分にとっても励みになる、大事な時間でした」
- 2 展覧会で物販を担当したショップ店員の方より。「私自身、作品を見れば見るほど、新たな発見があり、ドキドキ、ゾワゾワとした感じがしてとても心地いいものでした。期間中、作家さんの創作活動の時間も設けられ、一心不乱に制作に打ち込む作家さんと、その見事な出来栄を、息を呑んで見つめるお客様の様子に新鮮な感動をもらいました」

県外の方々との意見交換より

- 1 展覧会のキュレーションを担当して頂いた福岡のキュレーターより。「今回も十分な調査を行うことができなかったことは心残りですが、制作の場を拝見させていただいたり、作家さんやご家族、支援者の方々から直接お話をお伺いできたことは、個々の作品について深く知ることができただけでなく、人がものを作ることや表現することそして生きることについて、考える大切な経験となりました。パンデミックの不安が消えない状況下で貴重な機会をくださった皆様にお礼申し上げます」
- 2 展覧会場作りに協力頂いている福岡のインスタレーションアーティストより。「今回は作品の調査から関わらせていただき、作家やご家族みなさん、各施設の担当者みなさんからも直接お話を伺えたり、作品を拝見できたことは、展示計画や制作のために有意義な機会にさせていただきました。本当にありがとうございました。また熊本県立美術館や事務局、関係者のみなさんにもたいへんお世話になりました。ありがとうございました」



松本寛庸
Matsumoto Hironobu

1991年 山鹿市



アイリントワー

松本は色鉛筆と水彩ペンを用い、極小の点や鱗のような小さな面の集積で天体や地図、建物、動物、人間など様々なイメージを描き出す。近年ではより抽象的な模様が大きな画面を覆う作品がみられるようになってきたが、ブラックホールや銀河など宇宙にまつわるものを描いてきた松本が描くそれは、分子や原子などの微視的な物理現象を表しているのではないかと思わせる。3枚の大画面に果てしなく細胞のような丸い模様が描かれた《生命の泉》は吸い込まれるような透明感がある。

神秘的な抽象がある一方で、動物や乗り物といった具体的なものも変わらず描かれている。現在展示中の飛行機や潜水艦を1枚の画面に2体ずつ描いたシリーズは、もとは全部で24点からなるシリーズ作品だ。第2次世界大戦期の日本、アメリカ、ドイツの戦闘機から、旧ソ連の迎撃戦闘機、現代の旅客機まで、様々な飛行機や潜水艦が一堂に集められている。様々な歴史をもつ、しかし美しい造形の乗り物たちは、すべてに扇形の模様や輪状の水玉など松本らしい模様で覆われることで元のイメージとはまったく異なる印象に描かれている。

2010年の「アール・ブリュット・ジャポネ展」(パリ)以降、スイス、オーストリア、ドイツ、東京など国内外の展覧会でも作品が紹介される。2015年、2021年のVOCA展に出品。



藤岡祐機
Fujioka Yuuki

1993年 熊本市



無題

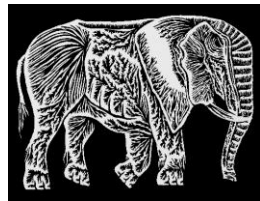
小学1年で初めてはさみを持って以来、藤岡は紙を切り、美しく繊細な造形を作り続けてきた。小学生の頃の初期作品は、様々な抽象的な形体を切り出した切り絵のようなものだったが、そこに楕円の切り込みが加えられるようになり、切込みはしだいに細く繊細になっていった。現在では0.1mmに満たない細さで切り込みが入れられている。切られた部分はらせん状にカールしており、まるで糸の束か羽毛のようである。一カ所だけ斜めに入れた切り込みはすべての紙片に見られる完成の印だ。

言葉を話さない藤岡が、この美しい紙片をどのように捉えているのかは誰にも確かめることができない。彼にとって、切る行為が特別な意味をもつことは間違いないが、完成した一片一片の大きさや形、紙の選定のこだわりをみると、どうやら単純に切ることを楽しんでいるだけではなく、出来上がった紙片の形や切り込みの長さには彼なりのねらいがあるようだ。紙の質感、色、形、切り込みのバランス、すべてが慎重に計画され、彼にしかわからない数ミリ単位で立ち現れる美の形が追求されているのではないかと思えてくる。



渡邊義紘
Watanabe Yoshihiro

1989年 熊本市



無題

渡邊は様々な動物を切り絵で表現する。驚くべきはカッターを使わずはさみだけで作っていることだ。つまり、1枚の紙を一筆書きのように切り出して作成しているのだ。

はさみの線描で、シルエットだけでなく、体の凹凸、量感や毛並み、羽などを巧みに表現している。あまりにも細かく切り出すため、作業している最中は紙がばらけ、完成形が分からないような状態になるが、本人にははっきりとわかっていて瞬時に形を整える。どんな複雑に切られた作品であっても全体のバランスは一切崩れない。まさに超絶技巧だ。

完成作品は、ときにはお母さんの手で風合いのある背景の和紙の上にレイアウトされ、切り抜いた印影が貼られ1枚の絵に仕上げられることもある。親子の合作のような作品の在り様も魅力的だ。

また、クヌギの葉を折り紙のように折って動物を作る「折り葉」の仕事も渡邊の代名詞のひとつだ。折り紙の折り方を落ち葉で実践しているのだが、乾燥すればもろく取り扱いにくい素材で、ここまで小さく繊細な作品を作ることは容易ではない。彼の持つ魔法のようなスキルに感嘆させられる。

作家紹介



荒木聖憲
Araki Minori

1994年 玉名市



KUMAMOTO CITY

テレビで見た“放浪の画家”山下清にあこがれて、中学生時代から独学でちぎり絵を始めた。使うのはいつも色紙だが、日々制作方法に工夫を凝らし、様々な技法を編み出している。ちぎった紙をよって作る糸のようなこよりは荒木の欠かせない技法のひとつである。

油絵を描くように下地を作り、その上に紙を重ねて描く方法は山下清から学んだという。

最新作《KUMAMOTO CITY》は通町筋電停の交差点から熊本城を見上げる構図である。この構図の絵は過去に何枚も制作しているが、今回は前景にスクランブル交差点を渡る人々の姿が描かれている。人々はカラフルな輪郭線で囲まれ、ビルの色彩は現実より色鮮やかだ。荒木によると「現代アート風」なのだから。人々はマスクをしていて、表情は読めない。少し奇妙な「今」の風景は、近い将来古臭いものになってしまうことを願いつつ1枚の絵に仕上げた。



内野貴信
Uchino Takanobu

1974年 熊本市

様々な大きさに切った段ボールや厚紙に、アクリル絵の具を使ってカラフルな絵を描くのが内野のスタイルだ。モチーフは身近な食べ物や靴、風船、人、動物、名画の模写など実に幅広い。背景は必ずパッチワークのようにいくつもの色に塗り分けられており、その配色の大胆さも魅力の一つだ。また、裏側には描いた年月日と何を描いたのかが記されることも見逃せない。



緑のカエル

どんなものでもマンガやピクトグラムのように、独自の観点で特徴がとらえられ、シンプルな形に単純化されている。線は明確に迷いなく引かれているが、下書きはしない。見たまを写生するのではなく、彼の頭の中にあるイメージが絵になるのだ。



大林健吾
Oobayasi Kengo

1951年 熊本市

大林が描くのは具体的な形を結ばない線と筆触からなる抽象的な絵画である。

通所する施設で就労の時間に描いている。用意された題材を目の前にして描くため、具体的なものの名前が題名につけられているが、題名とそれらの色彩は必ずしも一致しない。おそらく彼のイメージの中には対象物があり、絵になる過程で色や形といった具体性が消されていくのだろう。塗られた部分と余白との均衡が快い感覚を誘う。文字か記号のような複数の形が散らばっている。解読できるものではないがまるで擬声語か擬音語のように画面から囁きが聴こえてくるようだ。

母親のことが大好きな大林は「おかあさん、おかあさんがええもん」とつぶやきながら絵を描いている。描き込まれた言葉は母への秘密のメッセージなのかもしれない。



シクラメン



菊川豊
Kikukawa Yutaka

1945年 菊池市



春の男女

クレヨン、絵の具、マジックペン、靴墨と、様々な画材・技法を使いこなし「自分の頭の中に出てきた」独創的なイメージを描く。頻繁に登場するのは、人の顔や魚、鳥を合体させたイメージだ。それらはどこかピカソのキュビズム作品を連想させるし、カラフルでユーモラスでもある。そうかと思えば、靴墨を使ったモノトーンで凄みのある作品を描くこともあり、その作風の幅広さに感嘆させられる。

中学を卒業後、家業の青果店などで働き、50歳を過ぎたからグループホームで暮らしている。絵を描き始めたのは64歳の時で施設のレクリエーションがきっかけだった。最初は乗り気ではなかったが、楽しさに目覚めると自室で創作に没頭するようになった。2015年に熊本県立美術館分館で開催された「第1回アール・ブリュット展覧会」に作品が選出されたことで、さらに創作意欲が増したという。



鎌崎勝芳
Kuwasaki Katsuyoshi

1985年 菊池市



里芋

「形や物にとらわれず、自分の感性で見たものを描く」という鎌崎の作品は、一見すると完璧な抽象絵画のようだ。クレヨンでしっかりと塗り込まれた色鮮やかな面の組み合わせには、鎌崎の洒脱な色彩感覚が表れている。

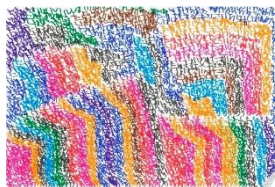
施設で絵を描く際は、特定のモチーフを見て描いているそうだが、出来上がった作品の形や色は、必ずしも対象と対応していないようだ。例えば《シャケ弁当》という作品は、お弁当箱を真上から見た絵と推測し「どこがシャケでどこがご飯だろうか？他のおかずは何だろうか？」とタイトルからあれこれ想像したくなる。

そんな楽しさもあるが、実際のところ、鎌崎は見たものを絵として描くアウトプットの仕方がユニークなのだろう。見たままを描くのではなく、見たときの印象や気持ちを、色や形に乗せて表現しているのかもしれない。



桑原 凜
kuwahara Rin

2000年 熊本市



モジ文字アート

カラフルな線で書かれたひらがならしき文字が画面を埋め尽くす。区画ごとに異なる色で並ぶ文字が直線やかぎ型を成し抽象絵画のような画面が生みだされている。作品を並べてみるとそれらには法則があることがわかる。シンプルな直線からかぎ型が生まれ、やがてかぎ型が幾重にも重なって複雑な画面ができていったのではないだろうか。形を構成する文字は判読できないが、自分の名前を書いているのかもしれないし、好きなプロレスラー「おかだかずちか」や、ゲームキャラクターの「まりお」と書いているのかもしれない。しかし、文字を読もうと細部を追うと、氾濫する色と形の波に飲まれるように混乱させられる。

高校卒業後、12歳違いの妹があいうえおを練習する姿を見たのをきっかけに鉛筆で紙一面に文字を書くようになった。最初は鉛筆の黒1色だったが、妹が図工で絵を描き出すと、桑原も水性ペンを用いたカラフルな文字を描くようになった。



駒田幸之介
Komada Konosuke

1989年 熊本市



無題

駒田はボールペンやマーカーペンやクレヨンなどで画用紙に線を引いていく。具体的な形をかたどっているのではなく、様々な方向へ向かう直線や曲線が、気の遠くなるほど何度も重ねられることで三角形や四角形、風景のようなイメージが生み出される。その作業に終わりではなく、一度完成したかに見える絵の上に新たな線が重ねられる。いくつもの色が混ざり合い、画面はしだいに不思議な質感の黒色に近づいていく。

その変化の途中、見る者の想像をかき立てるような絶妙な画面になったところでご家族がスケッチブックから画用紙を取り出しお手製の額に収めるのだ。実は変化し続けるドローイングを見つめ、選び取るという、共同作業を経てこれらの作品は展覧会会場に並んでいる。



田代 克也
Tashiro Katsuya

1969年 熊本市



やっつけろー!!

田代はアニメのキャラクターや、動物、施設の職員などを鉛筆、色鉛筆、マジックペンで描く。子ども時代に親しんだ『巨人の星』『鋼鉄ジグ』『海のトリトン』『ど根性ガエル』などがお気に入りだ。ただし、どんなモチーフでも田代独特の形式のキャラクターに変換される。丸顔で首が無く、ぱっちりとした目の愛らしいキャラクターだ。

施設の職員がインターネットなどから集めたアニメの画像を参考にしながら描くが、やはり子ども時代に見たものの方が得意なようだ。

『巨人の星』の有名なちやぶ台返しのシーンは文字で場面の説明まで加えられている。どの絵も迷いなくほぼ同じ順序ですらすらと描く。

田代のイラストは、通所施設のグッズなどに多く採用されており、可愛らしい絵にはたくさんのファンがいるそうだ。



中満 優生
Nakamitsu Yuu

2001年 山鹿市



夏の終わり

黒い線で描かれた網の目やうろこ状の模様のなかをマジックペンで1色ずつ丁寧に着色し、うごめくような文様が描き出されている。

絵を始めた頃は黒の単色で描かれることが多かったが、しだいに塗り絵のように色を付けるようになっていった。抽象的な模様が画面全体を覆うものがあれば、動物などのモチーフがカラフルにデザインされて描かれることもある。区画を区切って着色する点など、描き方の特徴は見られるが、現在は様々な画材、画風を試しているようだ。

不登校がちだった中学時代、美術教諭に勧められたことがきっかけで絵を描くようになったという。色々な人に絵を見てもらいたいという気持ちが芽生え、現在は描いた絵を SNS に投稿している。



中山 颯良
Nakayama Sora

2002年 山鹿市



しまうま

中山は油性マジックペンを使い、水玉や同心円の模様などカラフルでポップな動物を描く。何とも言えない愛嬌のある顔や明るい配色の動物たちは、見る者の心をつかむ。

小学2年生のとき、12色のマジックを渡されると夢中で描き始めた。次々と生まれる独特のキャラクターは「かわいい」と評判になり、絵画展が開かれ、スタッフ T シャツのデザインに取り上げられるなど、地元で愛されるようになっていった。大人になった現在も、山鹿市のひだまり図書館で作品展が続いている。事業所に通いながら、気が向いた時に描いている。



野尻三正
Nojiri Mitsumasa

1947年 山鹿市

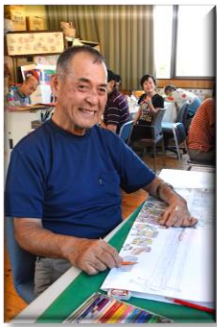


ダリア

野尻の作品はどれも紙のすみずみまで高い密度で描き込まれているという特徴があるが、この8年で作風の変遷が見られることも興味深い。はじめはクレヨンが用いられ、個々のモチーフは大きく、形が比較的はっきりとしていた。ところが、次第に画材はより細かな線を描くのに適した色鉛筆やボールペンに移り、一つ一つのモチーフは細かく、画面全体に広がっていった。

近年の作品では、ボールペンの震える線で描かれた、植物文様のようなものが全体を覆い、その隙間を色鉛筆のカラフルな色が埋めている。一つ一つのモチーフは判然としないが、人の顔、松かさ、シダ植物の葉のようなもの…と様々なイメージが隠れているようだ。1点1点バラエティに富んでいて、類のない絵ばかりだ。

野尻は、これからどんな絵を描きたいかという支援者の質問に「他の人が描いとらんような絵を出したが良か」と答える。1作品ごとに新たな試みが密かに繰り返されているのかもしれない。



濱崎文明
Hamasaki Fumiaki

1952年 熊本市



自動車

濱崎はこれまで見てきた景色の記憶をもとに、俯瞰的な視点で描いた風景画、身近な情報が書き込まれた地図のようなものなど、様々な作品を描いている。川には魚、道路には車や人がぎっしりと描き込まれ、どの絵にもぎやかだ。長年熊本で暮らし、散歩や外出が大好きで公共交通を利用して気ままに散策してきた濱崎は個人的な記憶など多く情報が詰まった熊本の風景を多く描いている。

《僕の庭》という代表作は 10 枚を超える画用紙がつなぎ合わされた大作で、熊本の市街地を記憶に基づき描いている。そんな濱崎だが、今回は最近手掛けている折り紙の台紙に車を描いたシリーズを展示している。色や形は様々で、車内や、ときには車の外にも人が描き込まれている。まるで地図の作品から切り取ったようだ。

作家紹介



東 真且
Higashi Masakatsu

2014年 菊池郡



太陽の塔

現在小学 3 年生の東は、1970 年大阪万博のシンボルである岡本太郎の《太陽の塔》が大好きだ。大阪万博の歌を歌いながら砂場に大きな《太陽の塔》を描いては消してを繰り返す。他にも、顔にチョークで絵を描いたり、下足場で積み木をしたり、彼の日常は創造性にあふれている。

東が《太陽の塔》を知ったきっかけは、YouTube で見た「びじゅチューン」の「保健室に太陽の塔」だったようだ。「びじゅチューン」はNHKで放送されている様々な美術作品をモチーフにしたアニメーション。「保健室に太陽の塔」は、《太陽の塔》を、生徒の悩みを受け止める保健室の先生になぞらえた歌詞だ。

砂場に自分の体よりずっと大きく描かれる《太陽の塔》は単純な線ながらその特徴が的確に捉えられている。東は YouTube でびじゅチューン以外の「太陽の塔」関連の動画を見たり図書館の本から知識を増やしていったようだ。彼の頭のなかでまだ実物を見たことがない「太陽の塔」はいったいどのようにイメージされているのだろうか。東にとって砂場での創作は、学校という難しい社会と関わるための切実な手段だったのではないだろうか。



平山 由美
(Hirayama Yumi)

1961年 菊池市



キハダマグロ

平山は動物や花をデフォルメして明るく魅力的な配色で描く。鯉や、キハダマグロ、カツオなどの魚は、まるで熱帯魚のように色鮮やかで、個性的なフォルムだ。キリンやペンギンはぬいぐるみのような丸みのある形で、表情も愛らしい。図鑑などを参考にして描いているそうだが、どの絵も平山独特の愛嬌いっぱい
の形、明るい色に仕上げられている。

平山は早くから絵を描く機会が多かったが、以前は黒が基調で、背景や対象も黒く塗り潰しているほどだったという。色彩豊かな方向へ変化したのは、施設での活動の時間として絵画に向き合うことになってからである。旺盛な制作意欲で休日にもクレヨンを手にとり描くことも多い。2018年の「生の芸術 Art Brut 展覧会」で作品が展示されたことで、制作への熱量は
いっそう高まったようだ。



本田美奈子
Honda Minako

1956年 熊本市



作品番号 323

本田のスケッチブックには色とりどりの絵と短いフレーズの言葉がセットで描き込まれている。頻出する「いえぐるみ」と「たかたか」の由来は不明だが、多くの言葉は図鑑からの引用だ。いつも使っているのは子ども向けの『自然大図鑑』という動植物、地質、宇宙などについて書かれている本だが、他の入所者と図鑑を交換して描くこともあるそうだ。

色鉛筆で描かれる絵は、図鑑の模写というわけではなく、どれも本田流にアレンジされた形体で、パッチワークのようにカラフルに着色されている。そこに切り取られた言葉が組み合わせられることで、不思議な楽しい画面ができあがる。

本田は、2001年に施設に入所したころから本格的に絵を描き始めた。展覧会にも出品し、2013年の「第26回熊本市市民美術展アートパレード」では奨励賞を受賞している。



曲梶智恵美
Magarikaji Chiemi

1981年 熊本市



街-海辺の街-

曲梶は、様々な素材を重ね合わせたコラージュ作品を手掛けています。素材として用いるのは写真、編んだ麻紐、ビーズなど様々で、絵の具やクレヨンを用いた描画も組み合わせられる。

手先を使ったものづくりを得意とする曲梶は、主治医の進言もあって、言語によるコミュニケーションよりも創作を通じて自己表現を行うようになった。編み物をはじめとする手芸の技法が自由な発想で画面に取り入れられ、彼女独自の表現手法として完成されている。近年の作品は、糸やビーズ、紙粘土で作ったパーツなどが立体的に盛り込まれ、平面作品という概念では捉えられないものに発展している。いずれも様々な要素が詰め込まれた密度の高い作品だが、それらは衝動的に重ねられているのではなく、明確なイメージに基づき、制作途中で何度も俯瞰して先の展開を練りながら構築されている。

作家紹介



牧野慎也
Makino Shinya

2001年 菊池市



ペットボトルランプ

これまで、牧野の作品は、画用紙にクレヨンや絵の具で描いた作品と、透明テープでコーティングされた小さなカードのシリーズという大きく2種類が見られた。

クレヨン画はおもに日中を過ごす施設で就労の時間に描かれたもので、花や果物など身近なものがモチーフとなっている。画面いっぱいズームアップされたり、デフォルメされたモチーフは、意外にも物の特徴が良く捉えられており、見る者に新たな気づきを、与えてくれる。

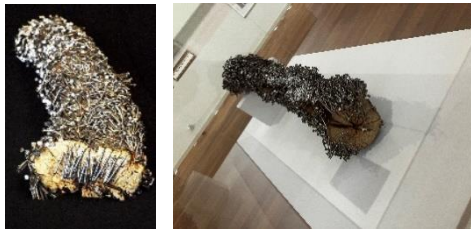
小さくカットした牛乳パックの裏側に描いてテープでコーティングする作品群は自宅で作られている。今回はマジックペンとセロファンテープのみでスタンドグラスのような不思議な質感の作品が登場した。

それぞれの画材によって異なる作風が展開されているが、どの作品も対象を見ることの楽しさや、画材に導かれて描くことの楽しさ伝わってくる。



松下高德
Matsushita Takanori

1947年 熊本市



無題

ぶどうの木に黙々と無数の釘を打ち込んでいく。木肌を埋め尽くした釘のすきまに、また釘を打ち込む。松下には完成や終わりというものはないようで、通所施設の職員が声をかけ、木を取り換えるまでひたすら釘を打ち続ける。結果的に数百本、数千本の釘が折れ曲がりながら木肌を覆う見たこともない造形が出来上がる。

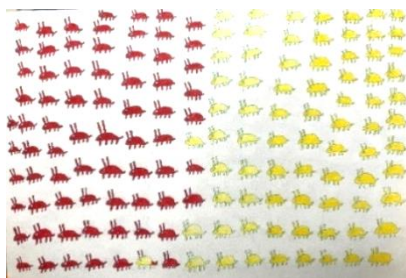
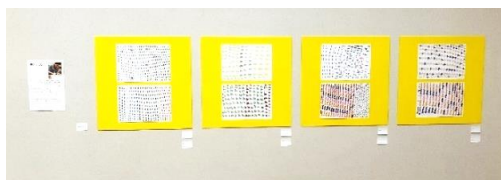
見る人を圧倒する独自の作品は、県外の美術展でも紹介されるなど評価を受けている。50歳の時に入所したが、当初は芸術活動に興味をなさず、紙すき用ミキサーのスイッチ係だった。ところが職員が、母親から鳥の巣箱を作ったことがあると聞き、金づちと釘を渡したところ、制作に熱中するようになった。

最近では、圧倒的な作品を作る松下に憧れて、施設のなかで釘打ちの作品を模倣する方も現れている。



森山茂
Moriyama Shigeru

1962年 熊本市



うさぎ

震える線でどこか所在なさげな表情の二頭身のキャラクターが、まるでスタンプのように繰り返し並べて描かれ、画用紙を埋め尽くしている。このキャラクターは職員の間で「ブルブルおじさん」と呼ばれている。約100個のギンナン一つ一つに描いたこともある。

自発的に描くのは、このブルブルおじさんだけだそうだが、今回はキリン、ライオン、ウサギ、カメという4種類の動物も登場している。いずれも個性的で愛嬌たっぷりだ。4種類の形はそれぞれ決まっていて、さまざまなカラーバリエーションで繰り返し描かれている。ひかえめな性格を反映するように、絵はだんだんと小さくなっていくそうだ。

かつて施設の秋祭りで「ブルブルおじさん」のキャラクターの手づくりTシャツを販売したところ、一番人気だったという。森山のファンは多く、インディーズバンドのCDジャケットとして採用されたこともある。



山口秀隆
Yamaguchi Hidetaka

1982年 宇土市



夕日に映える御輿来海岸

幼少の頃から電車が大好きだった山口は、自分で撮影した写真や鉄道雑誌を見ながら、画用紙いっぱい電車の絵を描いてきた。

新幹線からローカル線まで様々な種類の車両の特徴を捉えることはもちろん、敷石一つ一つまで丹念に描く。そんな山口が動物もよく描くようになったのは、熊本市動植物園の写真集を贈られた2018年頃からだった。そこからさらにネオンが煌めき人通りの絶えない街の風景を描くようになった。

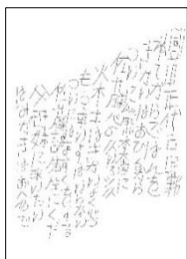
近年の新作では、抽象画のような虹色の模様が、空や動物の体などに広がり、画面はいつそう高密度になっている。描くモチーフも、電車や動物にとどまらず、身近な人物などいつそうバリエーション豊かになっている。たゆまず発展する山口の絵画は、本展に登場するたびに観客の皆さんを楽しませてきたことだろう。

作家紹介



山品聡美
Yamashina Satomi

1967年 山鹿市



きかい浴

山品はスケッチブックやコピー用紙にボールペンや鉛筆で文字を書いている。内容はどれも身近なものごと。県名や都市名、和風月名、数字などが、漢字の練習のように繰り返し書かれたものや、大好きなタレントの名前やイラストが描かれたものなど内容は様々だ。

今回は、日々のできごとや願望が書かれた日記のようなものをお借りして展示している。施設の職員や通院している病院の先生、父母妹など身近な人の名前が登場し、山品の日常が垣間見える。

彼女の作品の魅力は、「山品フォント」などと呼びたくなるような、アレンジのきいた独特の書体だ。山品の入所している施設の職員の中には彼女に書いてもらった名前で作っている方もいる。

また、1行ごとに斜行する文字のかたまりが織りなす形も、まるでコンクリート・ポエトリーのように、言葉の意味を脱し、造形としての美しさを感じられる。



吉村優音
Yoshimura Yuuto

2011年 熊本市



ぼくの頭の中の脳発明

吉村はカラーペンを使って画用紙いっぱいのにぎやかな世界を描き出す。絵本のキャラクターやオリジナルのキャラクターのような

動物をはじめ、食べ物や道具など様々なものが1枚の絵の中に詰め込まれている。ともすると散漫な画面になりそうところだが、モチーフの配置や配色が巧みでバランスよくまとまっている。

小学校入学後に担任から進められて絵を始め、絵画やアニメのキャラクター、動物などを自由に描くようになった。小学5年生の頃から油絵教室にも通い始めた。

ちなみに、《ママが大好きなアーティスト》は吉村のお母さんが愛してやまないロック・バンド「エレファントカシマシ」のボーカリスト宮本浩次を描いたものだ。吉村は同モチーフの絵を何枚も描いていて、親子の様子がほほえましく目に浮かぶ。





展覧会来館者の感想



○今回初めて家族が作家として認めて頂き、展示してある作品を目にして、日常にあるものが不思議で嬉しさでいっぱいになりました。また他の作家さんの作品もどれも素晴らしく、アートに障がいの壁はない事を実感しました。アールブリュットの方に感謝します。ありがとうございました!息子にも今後も描き続けていってほしいです。

○作家さんの作品それぞれにその人の真剣さ、楽しさ等の感情表現が独特に見られて心が動かされました。アート活動を熱心に取り組まれている事業所や施設での仕事をしたいと思っています。

○どのお作品も素晴らしく、心がふるえました。もっと自由でいいんだー!!と教えて頂きました。ありがとうございました。

○無垢なる魂の作品の数々に魅了され、圧倒されました。携わられる全ての方に感謝!

○いつも力をもらっています。来る度に豊かに力強くなっているように感じます。作者さん、ご家族、運営にかかわる方々それぞれの力を感じます。ありがとうございます。

○どの作品も心に響くものばかりでした。それぞれに違った表現をされていることも印象的でした。ひとつひとつの作品から感じるものもありながら、作者による個性もはっきりと表れていて、人はそれぞれ何によって心のうちを表すかが違うということを、強く認識させられました。流されるように忙しく生きる毎日ですが、立ち止まって考える機会をいただきました。ありがとうございました。

○彼らの真っ直ぐな作品が大好きです!これからも末永く続けて下さい😊

○どの作品も生命力が感じられて、とてもステキでした。ウチの孫、孔明も自閉です。何か得意な所を見出してやれたらと思っています。

○以前、アールブリュット熊本に関する研修を受けました。障がい者の社会参加や学芸員との繋がりなど全国をみてもあまりない取り組みを教えてくださいました。今回、熊本県に来る機会があり、実際に展覧会を観させていただきましたが、本当に芸術的な指導を受けていないのかと疑うほど、作家さんのセンスやきめ細やかな作品に大変驚き、感動しました。作家さんの年齢層も幅広いところにも驚きました。私が住んでいるところでも、地域と繋がって社会参加支援ができるといいなと感じました。展覧会に展示することで更に作家さんの意欲を引き出すこと、作家さんだけではなく支援者も一体となって社会参加しているところがとても素晴らしいなと感じました。実際に観に来て良かったです。素敵な空間を見させていただき、ありがとうございました。

○今回自分の中に美術に対する考え方が広がったと思いました。どこか決まった基準でものひとを見てきたことに気付かされた自分の価値基準の狭さを感じ、今回大変勉強になり感動しました。ありがとうございました。

○ぼくは去年も展覧会を見に行ったけど、今回もすごく特にポスターにあった布や糸を使った作品やぶどうの木にくぎを何個も打っている作品が「まねしてみたい」「すごい」と思いました。どの作品もどの作家さんもどくどくのセンスがみりよくて来年もあるならまた行きたいです。

○広い会場で様々の芸術家のアート、心がウキウキ元気になれる作品がいっぱいでした。毎年見せて頂いています。会場で作家さんが来られていて【あった!!】と喜ばれている姿、印象的でした。

- とても素晴らしい作品で見入ってしまいました。作者さんの思いがあふれ出しています。すばらしい作品に出会いの感動の連続でした。中山颯良さん、いいですね。
- 今年は特に色彩豊かでカラフルな作品が多かった印象です。この空間に居て楽しく幸せな気持ちになりました。負のイメージはいっさいなくプラスのメッセージを感じられたのがすごいなと思います。
- 個性あふれる作品ばかりで楽しく拝見しました。1年に1度のこの展覧会、とてもたのしみにしています。若い人たちから結構年配の方まで力強いですね。エネルギーをもらいました。ありがとうございます。
- ステキな作品ばかりで感動しました。一つ一つの作品がとても丁寧に作られていてそれぞれの方の言葉にはできない心の奥が表現されているのを強く感じました。中学校で特別支援学級を担当していますが、子どもたちもとても楽しそうに表現しています。
- ステキな作品を作成した全ての作家様方、この会を支える方に感謝の念が絶えません。また、吉村優音さん今回も素晴らしい作品が出来ましたね。一心不乱に描く姿をとても尊敬しています。好きなことを続けながら、優音さんの成長を楽しみにしています。
- 前回の展覧会もそうでしたが、心が洗われるような気持ちになり、とてもすがすがしい感じが好きです。心が自由になります。
- 支援学校に勤めているものです。同僚にすすめられて見に来たのですが、来て良かったと本当に思いました。これからの創作活動に色々なヒントを頂いた気がします。子どもたちと一緒に自由な発想で楽しいで活動していこうと改めて思いました。



ART BRUT

2022.11.16(水) - 27(日)
生の芸術

アート
ブリュット
展覧会
VOL.8

たわけでもない。熊本が育んだ魂の表現

観覧無料

藤岡祐機 / 渡邊義紘 / 荒木聖憲 / 内野貴信 / 大林健吾 / 菊川豊 / 鎌崎勝芳 / 桑原凜 /
也 / 中満優生 / 中山颯良 / 野尻三正 / 濱崎文明 / 東真且 / 平山由美 / 本田美奈子 / 曲棍智恵美 /
恵 / 森山茂 / 山口秀隆 / 山品聡美 / 吉村優音 (五十音字順) 特別展示 = ジャン・デュビュッフェ

トナース熊本 共催 = 熊本県立美術館 / 熊本県教育委員会 社会福祉法人愛隣園 協賛 = くまもとハートウィーク
株式会社再春館製薬所 助成 = 熊本県障害者スポーツ文化協会 熊本善意銀行 ひのくに知的障害児者生活サポート協会

事業 (令和4年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業)

本年度11月開催の「生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8」の会場最後に、担当キュレーター長尾萌佳氏の「おわりに」を掲示しました。今回、長尾氏の許可を得て、その全文を本報告書に掲載させていただきます。

おわりに（生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.8）

「生の芸術 Art Brut 展覧会 Vol.8」はいかがでしたか。

本展覧会では、「アール・ブリュット パートナース熊本」に寄せられた自薦他薦の作品情報をもとに作品を選び展示させていただきました。

「Art Brut (アール・ブリュット)」とはフランスの画家ジャン・デュビュッフェが提唱した言葉です。正規の美術教育を受けていない人々が自発的に生み出した造形表現を指し、直訳すると「生の芸術」を意味します。デュビュッフェが発明したこの言葉によって、私たちはそれまでアートと捉えられてこなかった、しかしアートと呼ぶほかないような多様で豊かな、心揺さぶる表現の世界を知覚する目を得ました。

しかしこの言葉の誕生から70年以上がたった今日、社会も、芸術の在り様も変化しています。アール・ブリュットの作り手たちは社会の周縁にあって、美術の歴史や社会と断絶したところで、誰にも理解されない内的な動機に基づき制作しているという神話的なイメージは崩れかけています。むしろ本展覧会出品作の作り手たちは、日々、様々な人と接し、社会の一員として暮らすなかで創作活動を行っています。

鑑賞されるべき「作品」を作っているという意図なく魅力的な造形を生み出している方がいる一方、作家意識を強く持ち制作活動にあたっている方もいらっしゃいます。したがって作品や作家をひとくくりに捉えることは難しいですが、展覧会の準備にあたりたくさん作品を拝見し、お話を伺うと、そこには描くこと作ることの喜びがあり、日常の中に多くの創造性があることに気づかされました。そして、日々生み出される無名の造形を掬い取る身近な人の存在と、その人との関係性が作品にとって重要な要素であることが見えてきます。例えば、紙に細かな切り込みを入れ繊細で美しい紙片をつくる藤岡祐機さんのお母さんはそれらを拾いあげ、まるで美しい自然物を観測するかのように色や大きさごとに分類して保管します。そのような作品への接し方が私たちに彼の作品の見方を示しているようです。駒田幸之介さんの終わりなきドロ잉は、折り重なる線が風景を結ぶタイミングでご家族によってスケッチブックから取り出され、お手製の額に収められます。渡邊義紘さんの超絶技巧の切り絵は、お母さんが風合いのある背景に美しく配置し1枚の絵に仕上げます。

このように、作品が生まれる過程を見つめると、創造を支える人たちの存在が作品を成り立たせる切り離しがたい要素であることに思い至るのです。

また、作家にとって創作行為自体が社会と関わることであると気づかせてくれます。

東真且さんにとって、砂場に「太陽の塔」を描く行為は、それ自体が学校という社会に参加するための方法であり、また、新たに知った世界について示してくれる表現なのではないでしょうか。曲樋さん、荒木さん、松本さんは作家意識を強く持っています。展覧会という場に並ぶ完成作品をイメージしながら、多くの時間を費やして自らの創作意欲を 1 点の絵に収斂させています。

こうしたエネルギーに満ちた創作物は、私達に、それまで知らなかった新たな世界を目の当たりにさせます。これらの作品は、見る者にとっても、未知なる世界へいざなう扉となるのではないのでしょうか。

ご来場の皆様が、この展覧会会場で、驚きや喜びに満ちた豊かな時間を過ごし作品の生まれる場に思いを馳せていただけたのならうれしく思います。

生の芸術 Art Brut 展覧会 Vol.8 キュレーター

長尾萌佳

アール・ブリュット パートナース熊本 理事・役員名簿

	役職名	氏名	所属団体及び役職
1	会長	西島 喜義	熊本市 元副市長 熊本市シルバー人材センター 理事長
2	副会長	安達 憲政	熊本日日新聞社 前編集員 熊本大学文学部非常勤講師
3	副会長	林田 直志	公益財団法人 永青文庫 常務理事
4	理事	栗崎 英雄	熊本県知的障がい者施設協会 前会長 (第二つつじヶ丘学園)
5	理事	日隈 辰彦	熊本障害フォーラム(KDF) 事務局長 (ヒューマンネットワーク熊本)
6	理事 事務局長	三浦 貴子	熊本県身体障害児者施設協議会 会長 (愛隣館)
7	監事	川村 隼秋	熊本県手をつなぐ育成会 会長
8	監事	塘林 敬規	熊本市社会福祉施設連合会 事務局長 (大江学園)
9	アドバイザー	藏座 江美	一般社団法人ヒューマンライツふくおか 理事 元 熊本市現代美術館 主任学芸員
10	アドバイザー	岩下 勉	熊本日日新聞社デジタル編集部 部長
11	アドバイザー	真武真喜子	元 北九州市立美術館 学芸員 インディペンデントキュレーター
12	コーディネーター	西 恵美	熊本市手をつなぐ育成会 会長
13	コーディネーター	土井 章平	野々島学園 理事長

社会福祉法人愛隣園 事務局

	役割名	氏名	所属
1	理事長	三浦 一水	社会福祉法人 愛隣園 理事長
2	事務局長	三浦 貴子	障害者支援施設愛隣館 総合施設長
3	事務局	田中 裕一	障害者支援施設愛隣館 副施設長
4	事務局	富田 芳博	障害者支援施設愛隣館 事務長
5	事務局	納富 久	障害者支援施設愛隣館 総務部副主任
6	事務局	堀田 直美	障害者支援施設愛隣館 総務部副主任
7	事務局	久武 康博	障害者支援施設愛隣館 地域福祉部副主任
8	事務局	松本 薫	障害者支援施設愛隣館 地域福祉部
9	事務局	福山 清一	障害者支援施設愛隣館 生活サービス部
10	事務局	清水誠一郎	障害者支援施設愛隣館 生活サービス部
11	事務局	三角 淳子	障害者支援施設愛隣館 地域福祉部

令和4年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業
(熊本県障がい者芸術文化活動普及支援事業)報告書

(発行元)

社会福祉法人 愛隣園 障害者支援施設 愛隣館
《アール・ブリュット パートナーズ熊本》

〒861-0551 熊本県山鹿市津留 2022 <http://aileans.com/saca/>
Tel:0968-43-2771 Fax:0968-43-2793 Mail:ailinkan@magma.jp

(編集責任者)

三浦貴子

(企画・校正)

納富久 堀田直美 久武康博 松本薫

(印刷・製本)

株式会社トライ

(表紙・裏表紙)

1. 駒田幸之介
2. 渡邊義紘
3. 中満優生
4. 桑原凜
5. 東真且

1				
5	4	3	2	

(助成)

令和4年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業
(熊本県障がい者芸術文化活動普及支援事業)